

# 三鷹市山本有三記念館館報

Yuzo Yamamoto Memorial Museum Report

号  
第 2009.10

## ◆開催中の企画展 山本有三記念館への道 —住宅・接収・青少年文庫—

### 山本有三記念館への感想や意見について

当記念館に、毎日、多くの皆様がお越しいただいておりますが、直接、感想や意見を頂戴する機会はそんなに多くはありません。そこで、ガイドボランティアの方に、「ご案内した来館者のことを隨時お聞きしています。山本有三作品や建築について造詣の深い方が多いようです。私も来館された建築家の方から、記念館と類似性のあるデザインを有し、一般には知られていない建造物を紹介していただき、見学に行つたこともあります。

また、来館者アンケートからも皆様について知ることができます。前回の企画展（八月までの集計分）では、二〇四人の皆様がアンケートに記入していただきました。来館者全体からは少數ですが、一定の傾向を知ることができますので、その一部をご紹介します。

住まいは三鷹市内が一七%に対し、東京以外の道府県から来られた方が実に三三%もいらっしゃいます。アンケートには近隣にお住まいの方の記入率が低くなる傾向があるとしても、遠方から来られている方が多いようです。

来館目的では、「山本有三に関心があるため」と

「建築に関心があるため」がほぼ同じ割合です。当館の特徴が良く出ています。また、有三作品を読んだことがあるまたは愛読している方が六五%ですが、その一方名前を知らなかつた方が一〇%いらっしゃいます。年代により分かれます。当館及び展示の感想では、とてもよかつたが四九%、よかつたが四四%とたいへん高く評価していただきました。

個別の感想では、建物がすばらしい。いつまでも保存に努めてほしいとのご意見が多く、また、展示では、数年前より展示の仕方が変わりわかりやすくなつた。有三の人柄や考え方が良く伝わるものであつたなど多くの方に評価していただきました。建物の解説表示をしてほしいとのご意見もいただきました。ガイドボランティアの案内については、勉強になつた。楽しく見学できたなどたいへん好評です。

その他、多摩地域の同種の複数の施設との連携について検討したら良いのではとの建設的なご意見もいたきました。

来館者の皆様の忌憚のないご感想やご意見により、さらに充実した魅力のある施設となるよう努めています。きたいと考えています。

館長 矢野勝巳



〈展示構成〉 I 住宅—清田龍之助と山本有三が暮らした家  
II 接収—山本有三と三鷹の家の戦中・戦後  
III 青少年文庫—研究所、図書館から記念館へ

〈会期〉 2010年6月2日[水]まで

山本有三記念館は、大正一五年頃商社役員の住宅として建てられました。その後、山本有三が昭和一年に購入し、代表作「路傍の石」や戯曲「米百俵」を執筆しました。昭和二一年、進駐軍の接收により有三はやむなく転居しますが、接收が解除された後は国立国語研究所の分室や「有三青少年文庫」として利用され、平成八年から「三鷹市山本有三記念館」として公開されています。

本展では、有三が暮らしていた頃を中心にして、施主清田龍之助に関する近年の調査結果、接収関係資料、文庫時代の貴重な写真などを通して、建築当初から現在に至る記念館の歩みをご紹介します。

# 特集

## 文庫の思い出

企画展関連特集として「ミタカ少国民文庫」や「有三青少年文庫」にまつわる思い出をお寄せいただきました。



門：当時は温かみのある木製の門扉だった。

### ◆◆特別寄稿◆◆ あるスイス人青年の受験勉強

デビット・ゾペティ

今年の初夏、二〇余年ぶりに山本有三記念館の前を通った。思えば不思議だ。書下ろし長編小説『命の風』に三鷹駅界隈が登場し、だいぶ取材したのに記念館のことをほぼ忘れていた。あれだけ世話になつたのに…。

一九八七年のことだ。祖国の大学を中退して一度目の来日を果たし、私は日本の大学に入るべく受験勉強に勤しんでいた。

日本語、日本史や社会など、一日に十三時間もの猛烈な勉強を己に課していた。住まいは六畳一間の狭い部屋。すぐ息が詰まる。図書館へ避難しても、同じく受験を控えた若者でごつた返し、これも落ち着かない。有三青少年文庫に初めて連れていってくれたのは沖縄出身の友人だった。近くで下宿していた彼は東京に来てから初めて雪を見た、と口癖のように話していた。冬のある日、白い灰が降り、掌を空に向けたら冷たい！これが雪か！と感慨無量だったという。雪国で生まれ育つた私にとつて俄に信じがたい逸話だった。

ともあれ、青少年文庫の奥の部屋に木造の小さな椅子と机が並んでいるではないか。最初は試しに三〇分ほどそこで漢字の練習をした。誰も邪魔に来ない。見学者も少ない。大きな洋館の静けさに包まれ、これまでなく集中できた。次の日は

半日、と大胆になった。井の頭公園近辺で昼食を

平らげてから赴き、閉館時間までいた。受付で手続きをした記憶も、職員と言葉を交わした覚えもないが、記念館スタディーは習慣化した。生活や勉強の内容がとても日本ので、受験のプレッシャーもあり、洋式の建物は私の隠れ家になった。

結局、同志社大学に受かった。専攻は国文学。

京阪の古本屋を歩き回り、講義と関係のない本まで読み漁った。『路傍の石』も読んだ。愛川吾一の奮闘を追いつつ、記念館で密に過ごした日々を懐かしく思い出した。しかし当時、谷崎や泉鏡花や開高健を手当たり次第に貪っていたためか、やや“固い”印象しか残っていない。せっかくの機会だから読み返そうと思う。きっと別の読み方ができるに違いない。

### ◇執筆者紹介◇デビット・ゾペティ（小説家）



一九六二年スイス生まれ。八三年初来日。九〇年同志社大学卒業後、テレビ朝日入社。「ニュースステーション」で記者兼ディレクターとして多数の特集を手がける。九六年処女作『いちげんさん』ですばる文学賞受賞、芥川賞候補になる。九八年テレビ朝日を退社し執筆に専念。その他、テレビやラジオ番組、企業PRビデオや講演会に出演するなど多岐にわたる活動をする。二〇〇二年初のエッセイ集『旅日記』で日本エッセイスト・クラブ賞を受賞。○五年初の書き下ろし長編小説『命の風』を上梓。

## ミタカ少国民文庫の思い出

菅原孝志（三鷹市在住）



サンルーム：現在は屋根が取り払われてテラスになっている



閲覧室：旧応接室・食堂（現・展示室A）には1万冊以上の蔵書があった。

私は昭和七年一一月の生まれですので、「ミタカ少国民文庫」があった頃は、第一小学校の四年生から五年生でした。先日、久しぶりに山本有三記念館を訪れましたが、昔と変わっていませんでした。六〇年以上も前のことなので、くわしくは覚えていませんが、二、三〇人は集まっていたと思います。本を読むだけではなく、あそこの芝生でボールを投げて遊んだりもしたことを覚えています。また、建物が印象的で、子どもながらもこういうものを洋館というのだとも思いました。

他には、眼鏡をかけた女の人が「おやつの時間ですよ」と言って、ビスケットなどを半紙に包んでくれたことが強く記憶に残っています。戦時下の食糧の乏しい時代でしたので。

その後、昭和一九年に第一小学校分教場が第四国民学校（現・第四小学校）となり、自宅から近くになりました。その第一期生です。後に、世界卓球選手権で優勝した萩村伊智朗は、同級生です。

### 記憶にある有三邸

荒川隆（三鷹市在住）

私の家を出て徒歩一、二分で玉川上水にて、そこを左に曲がれば三鷹駅方面、右に曲がれば山本有三邸の前を通って井の頭公園まで数分である。この場所に昭和一八年から六〇年余り住んでおり、私は子供の頃、犬を井の頭公園まで散歩に連れて

行くのが日課となっていた。毎日のように有三邸の前を通っていたにもかかわらず、現在のような風景は全く記憶にない。記憶にあるのはうつそうとした雑木林である。

有三邸が私の中で意識されるようになったのは昭和三三年に開設された教育研究所の看板のかかった建物と、有三青少年文庫が一般開放されてからである。その後昭和五〇年代には長男が幼稚園から帰ると、妹と室内に連れられて毎日のように有三文庫に出かけて本を読ませてもらつたことがあります。私もたまに有三邸と一緒に行く機会があつた。邸の南側のテラスが文庫の入り口になつており、一階は受付のカウンターが置かれ、壁にそつて本が並び真ん中には本を読む机と椅子が置いてあつた。二階はボランティアと思われる方が土曜日に子供たちに本の読み聞かせをするための部屋があつた。また現在きれいに手入れされ庭になつているところは木がたくさん茂っており、林の中にある子供図書館といった感じであつた。

◆「ミタカ少国民文庫」は昭和一七年七月二七日、有三五五歳の誕生日に開かれました。本が不足する時代に、読書の喜びを子どもたちに伝えたいという思いから有三は自邸に文庫を開き、蔵書を子どもたちに開放しました。しかし戦況の悪化に伴い、昭和一九年二月に閉鎖。約二〇〇〇冊の蔵書は、三鷹市と板木市の小学校に寄贈されました。一年半という短い期間ではありますが、次第に暗さを増す中で、文庫の存在は子どもたちに一筋の光を与えたのではないでしょうか。



↑山本有三ふるさと記念館外観。  
江戸時代末期に建てられた見世蔵  
がどっしりとした姿をみせる。

←記念館入口に置かれた「山本有三  
誕生の地」の石碑。



## 視察報告一山本有三ふるさと記念館

5月19日、ガイドボランティア研修として山本有三ふるさと記念館を訪りました。この記念館は、有三の生家の隣にあった蔵造りの建物を改修整備し、平成9年に開館しました。写真・原稿・書簡といった貴重な資料や、晩年に湯河原で愛用した品々などが展示されています。近隣には有三が眠る近龍寺があり、有三作品を育んだ一端を垣間見ることができました。

### 【山本有三ふるさと記念館情報】

開館時間／午前9時～午後5時

休館日／年末年始（12/29～1/4）、夏季・冬季の月曜日

入館料／一般200円 中学生以下200円

〒328-0015 栃木県栃木市万町5-3 TEL 0282-22-8805

## 山本有三記念館ボランティアレポート

### 思い出

松元聰美

台所にたって、母の手伝いをしていた娘時代。窓から有三記念館の松が見えていた。母が「面白い形の松ね。鶯が羽を広げているみたい。」と言っていた。素敵な洋館は、私の憧れだった。移動図書館のバスが、館の前に来た時は、借りに行った。

子ども文庫だった頃の館内には、3歳の姪には、ちょうど良い高さの本棚が並んでいた。夏休み、一緒に、路傍の石によじ登って寝転がり、蝉の声を聞いた。私はガイドボランティアになれて嬉しい。思い出と、有三記念館を大切にしていきたい。

### ボランティアガイドの1年

加藤規子

有三86歳の生涯で我々に残してくれた多くの事や、80数年前に建てられ、有三が住居とした記念館の魅力をどう伝えたらよいのかと迷いながらガイドの初日を迎きました。

1年を振り返ってみると、解説中の一言が来館者の記憶に触れ、ご自身の思い出を話して下さる方と会話が弾み、その中に次のガイドで参考にさせていただいた話題もあり来館者の方々に教えていただくことの多い1年だったように思います。

### 三鷹市山本有三記念館のご案内

開館時間／午前9時30分～午後5時

休館日／月曜日

※月曜が休日の場合は開館し、翌日と翌々日を休館

年末年始（12月29日～1月4日）

入館料／一般300円（20名以上の団体200円）

※中学生以下、障害者手帳持参の方とその介助者、  
校外学習の高校生以下と引率教諭は無料。

〒181-0013 東京都三鷹市下連雀2-12-27

TEL 0422-42-6233 FAX 0422-41-9827

URL <http://mitaka.jpn.org/yuzo/>

編集・発行

三鷹市山本有三記念館

### ◆◆◆ 来館者30万人達成!! ◆◆◆

開館から13年目となる今年の4月30日、記念すべき30万人目の来館者となったのは、この日に初めて来館された杉並区にお住まいの莊司克彦



さん・節子さんご夫妻。清原慶子三鷹市長より花束を受け取る

莊司さんご夫妻

「私自身が生きてきた時代の思想的背景を作った先達の足跡を辿ることができ、貴重な体験だった」また、洋館好きという節子さんは「こんな美しい建物は初めて」と語っていました。